

庄内協同ファームだより

No.173 2018年7月号



発行/

〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338

tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140

<http://www.shonaifarm.com>



埼玉でのサラリーマン生活を経て、地元へ帰郷し、農業者となつて8年目となりました。日本の農業従事者は年々減少し、私の地域でも例外ではなく、若手農業従事者は少なく、高齢化も進んでいます。何らかの対策をしないと荒地が増え、管理が出来なくなる心配があります。私も将来どのような農業をしたいかを考えていかなければならない時期になりました。

大量生産したモノを消費する現代、食べものもモノとして流通しています。消費者は値札を見て食べものの価値を計り、大量に安く生産する「効率性」が、家電製品同様に食べもののづくりの世界にも求められます。雨が降らなければ作物は育ちません。人間は雨を降らせることが出来ないように、本来命(自然)とは人間の計算通りにいかないという点で、非効率から逃れられないものはずなのに。

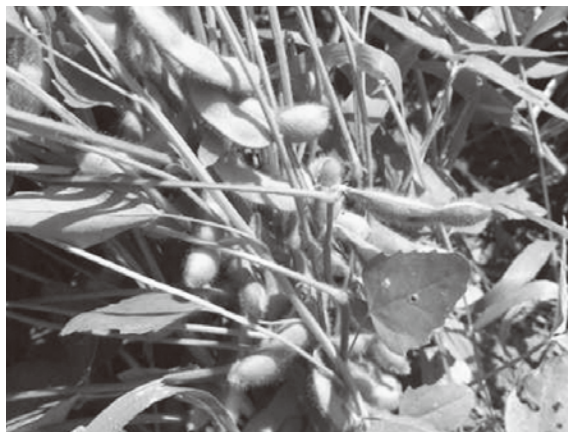
一次産業は、いつの時代も買い叩かれてきました。値段を下げるためには大量に生産するほかなく、効率性を追求する過程で、大切な手間ひまは省かれてき

ました。

しかし、それでは良いものをつくることはできません。食べ物の背景を知らない消費者は値段の安さで判断し、それを口にしています。こうした生産者と消費者の不健全なサイクルから脱するためには、両者が直接つながることで消費社会を乗り越えていく必要があります。

私の家では、大人2人、子供3人で米を1ヶ月20キロ程度食べています。料理する人に言わせれば「ご飯はおかずが必要で大変」「炊く手間がかかる」など簡単に食べれる物に比べると需要は減ってきています。それでもそんな手間や時間をかけても食べたいと思える農産物を提供することが、農業生産に携わる自分の使命だと感じています。

農業とは地域にとっても密接に関わっている職業だと思っています。食べる人も食べるだけではなく、現地に赴いて体験して次世代に繋がる顔の見える関係を築けたらと思います。そして自分の子供を含めた次世代が、夢を持てるような地域作りを農業を通して実現していきたいと思っています。



小野寺 貴紀

田植え交流会

石垣忠彦



5月26日にパルシステム埼玉の組合員と庄内産直ネットワークの生産者との田植え交流会が行われました。今年で16回目になります。

パルシステム埼玉さんからは35名、庄内産直ネットワークからは39名、合計74名と大きなイベントとなりました。

今回の交流場所は庄内町の家根合集落。月山と鳥海山、日本海に囲まれ、水が美味しく自然にあふれ美しい町で有名な所です。

交流田はJA庄内たがわの有機生産者、斉藤祐一さんの有機圃場。面積は約1反歩、品種はつや姫、カモ農法を始めて7年目になる圃場だそうです。隣の田んぼにはすでに苗が植えられており、カモが元気に泳いで



ました。間近で見た子供たちも大喜びです。

参加者全員の願いが通じたお陰で当日は晴天に恵まれ、絶好の田植え日和となりました。お日様に感謝したいと思います。



田植えに続いて庄内協同ファーム生産者、佐藤和則さんの圃場にあるビオトープとカモ農法の圃場が連なる通称'三川カモ街道'を見学しました。ザリガニやタニシ、又、実際に田んぼで泳いでいるカモを見ることができ、子供達はもちろん大人達にも喜んでもらう事ができました。

夜はみんなが楽しみにしていた懇親会です。地元の物、旬な物を食べていただきたいということで朝日地区で採れた孟宗と我が家で採れた椎茸を入れた'孟宗汁'が出されました。最後は花笠音頭をみんなで踊り楽しく有意義な一日となりました。



.....商
.....品
.....紹
.....介

しらやま しこく
「白山紫黒」



このお米は朝紫という品種の紫黒米です。白米に少量混ぜて炊くだけでとても綺麗なピンク色のご飯が炊き上がりますし、香りも独特の芳ばしさがあり、食欲をそそります。お客様の健康に資するものを提供したいという思いで、昨年までは全く肥料をやらずに農薬も使わない自然栽培をしていたのですが、だんだんと稲が弱くなってきたように感じたので、今年は自分で米ヌカを醗酵させたボカシ肥料を使用し、除草は週一回のペースで除草機を押しています。苗を育てている時は毎朝『おはよう』と声をかけていますし、心が乱れた時は落ち着くまで田んぼに入らないようにしています。稲に気持ち伝わるからです。パックする時も食べてくれる人の健康と幸せを願い袋詰めしています。

富樫 俊悦

「だだちゃ豆」

鶴岡市が「ユネスコ

食文化創造都市」に

認定されている理由

の一つとして在来作物

の豊富さが挙げられ

ます。在来作物とは

その土地で長年栽培、

継承されている作物

のことで「生きた文

化財」とも呼ばれ、鶴

岡では現在60品目が

確認されています。

その数ある在来作物の中でも筆頭に挙げられるのが

「だだちゃ豆」です。

茹でると芳しい香りがあたりに立ち込め、口に入

れると濃厚で複雑な旨味が広がります。収穫時期

は真夏の1か月間のみで、太陽の光をたくさん浴び

て成長しただだちゃ豆をアミノ酸や糖分がピークに

達したときに一気に収穫します。栄養効果も高く疲

労回復や夏バテ予防にもなるそうです。実際、だだ

ちゃ豆農家は毎日だだちゃ豆を食べてハードな収穫

時期を乗り切っています。庄内協同ファームのだだち

や豆は無農薬無化学肥料の有機栽培なので安心して

食べていただけます。みなさんもだだちゃ豆で夏を

乗り切ってください。

五十嵐 勇輝



庄内 おかあさんの
～おいしい台所～

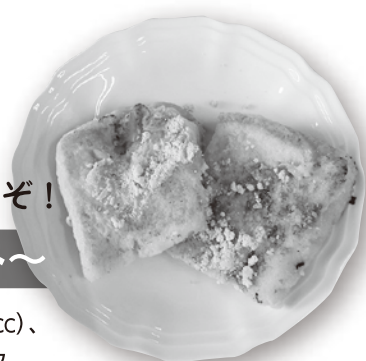
きなこの量はお好みで！朝食にどうぞ！

～きなこのフレンチトースト～

(材料) 食パン、卵(1個)、牛乳又は豆乳(100cc)、
砂糖(大さじ1)、きなこ(大さじ2)、バター

(作り方)

- 1 ボウルに卵、牛乳、砂糖、きなこを入れてよくかき混ぜる
- 2 食パンを4等分に切り、1につけ込んで、冷蔵庫で冷やす(15分～30分)
- 3 フライパンにバターを入れ、中火で2を焼いていく
- 4 こんがり焼き色がついたら、上にきなこをふりかけて出来上がり



五十嵐みずほ

ペンリレー 徒然草

五十嵐 英一



ようやく田面も早苗で緑一面となった6月の初め。とかく農作業に追われる

私ははほととする頃でもあります。

暖かな日差しが数日続いている今日この頃。今年の6月は、例年より高い気温のようです。晴れの日が多く外で農作業できるのはうれしいですが、6月から熱中症の心配をしなければなりません。

天気のように農作業の進み具合に大きく影響します。インターネットの天気予報を一通り見てはいますが、



それでも不安で仕方ありません。

天気によって、今日の農作業そのことにも狂いが出ます。予定通りにいかないのが農家の毎日です。

突然の雨で仕方なく別作業に変更となってしまうたり、逆に雲ひとつない空を眺めながら、雨を待ってみたい。

中でも植え付け・種まき等は「畑の準備は……植え床の状態は……」と、頭の中でグルグル予想される状況を感じ描きます。

この温度で明日の植え付けは大丈夫か、このくらいの湿り具合で播き付けに支障はないか、明日は雨ふりでなければよいが、と様々な思いを巡らし、心配する思いが頭を駆け巡ります。

また、予想外のことも発生します。あれ？麦がおかしい。葉枯れが発生した。大きく広がりました。対処したはずなのに、また雑草が動き出した。根がやられている。虫の発生が原因か。

連続の雨ふり、川の増水。作物への冠水の心配。根腐れ。川のごみの襲来……など、私が作っている稲や麦に限らず、農作物は自然や環境との戦いの連続です。

天気だけではありません。刈り取りの機械の具合がよくない、エンジンが不調らしい、キャタピラーの具合がおかしい、機械がぬかるむ、ベルトが切れた。煙が出ている。機械トラブルも

ある日突然やってきて、作業を遅らせます。

農家は一年間様々なアクシデントに見舞われながら、ようやく収穫にたどりつくのです（あー疲れる……）

しかし、そうやって作った農作物だからこそ、収穫の喜びもひとしおです。そして、みなさんの「美味しい」の笑顔が、毎日の農作業の励みになっています。

大山犬祭り

（毎年6月5日開催）



山形県庄内地方のお祭り

すぎのお
庄内三大まつりの一つ。その昔、梶尾神社の裏山に棲む化け物（ムジナ）を退治したメッケ犬に由来する300年の歴史をもつ祭りです。メッケ犬を象った犬みこしや、化け物に捧げたという仮女房を乗せた行列が古式ゆかしく練り歩き、華やかな「からぐり山車」が練り出します。

あとがき



「操作あゝ始め!!!」「よし!!!」班長の号令の元、斉に要員達が走り出す。私の地区ではこの時期になると早朝から厳しい消防操法大会の練習が始まる。素早く、糸乱れぬ規律の取れた揃った動作は見えて居て、とても綺麗で格好良いものに見える。

しかしながら、そこまで至る裏には消防団の暗部が隠されている。農家の団員間で話になると「3年に一度、大会に出場する当たり年の時は不作になる。」「優勝してしまうと更に訓練期間が延びるから家族にワザと失敗するように言われた……」こうした声も冗談ではなく実際に本当に起きているのだ。苗半作と呼ばれるほどに重要な時期に実際に労働力を取られ本業に支障をきたすレベルの訓練を要求され、その負担は自分のみならず家族や職場にまで及ぶわけだから当然とも言える。

無論、消防団が不必要というわけではない。消防団の活動を全て税金で賄うとすると1兆円かかるとの試算もあるし、何だかんだで田舎では初期消火の主力となるのは消防団である。ただ大きすぎる負担となっている式典礼式、操法大会など全く火事場では役に立たない訓練負担を減らし、実践的な活動へ変えるべきだと思うのだ。完全に硬直化してしまっている組織では末端が何を言っても変えられることは中々ないと思うが、せめて自分が手の届く範囲内ではこの流れを変えたいと思う。

（白）